

番号	題 目	座長・話題提供者
研-01 C-301	<p style="text-align: center;">動き出す土木学会技術者資格</p> <p style="text-align: center;">技術者資格評議会幹事会</p>	<p>座 長：池田駿介(東京工業大学)技術者資格評議会幹事長 話題提供者：岡村 甫(高知工科大学)技術者資格評議会議長 渡辺泰充(清水建設(株)) パネリスト：西田繁一((株)長大) 小谷健一(鹿島建設(株)) 深澤敦志(国土交通省)発注者責任研究懇談会 都丸徳治(日本建設コンサルタント(株)) 西野文雄(政策研究大学院)APECエンジニア 落合英俊(九州大学)</p> <p>平成11年度の理事会において、土木学会が認定する技術者資格制度を創設することが決定され、技術者資格評議会が設置された。新たに創設する資格制度は、倫理規定を尊重し、専門的能力を有する土木技術者を評価し、これを社会に対し責任をもって明示することを目的とするものである。平成13年度から動き始める技術者資格制度のあり方について、関係するパネリスト間および会員相互の議論を深め、より良い制度を模索するために研究討論会を開催するものである。</p>
研-02 E-201	<p style="text-align: center;">環境技術と国際化への対応</p> <p style="text-align: center;">環境工学委員会 (共催:環境システム委員会, 地球環境委員会)</p>	<p>座 長：大垣眞一郎(東京大学大学院 教授) 話題提供者：原田秀樹(長岡技術科学大学 教授) 「Appropriate Technologyの国際共同開発と技術移転」 山村尊房(国連大学高等研究所 客員研究員) 「技術移転と人材開発に関する国際機関の役割」 湊 隆幸(東京大学大学院 助教授) 「海外技術協力における建設マネジメント」 高田 純(日本環境コンサルタント(株)代表取締役) 「環境技術支援における日本企業の役割」</p> <p>経済の国際化とともに、環境問題も国際化してきている。多くの開発途上国では、水系伝染病を含む従来型の環境衛生問題や水資源問題が未解決のまま、先進国型のエネルギー消費や人口集中による環境問題や、微量化学物質による汚染が始まっている。一方、上下水道などの経営は民営化などの変革が急速に進んでいる。従来、開発途上国向けに環境浄化施設や技術を輸出してきた日本の役割も、ハード(環境浄化施設)から、ソフト(経営・人材育成・能力開発)重視へと変化しつつある。本研究討論会では、環境技術の移転や、人材育成、新しい環境事業の経営などの専門家を招いて、これからの環境問題の国際的な変化にどのように対応すべきかを討議する</p>
研-03 E-301	<p style="text-align: center;">橋梁の性能評価型耐震設計と新しい耐震技術</p> <p style="text-align: center;">地震工学委員会</p>	<p>座 長：川島一彦(東京工業大学) 話題提供者：家村浩和(京都大学) 運上茂樹((独)土木研究所) 幸左賢二(九州工業大学) 村田清満((財)鉄道総合技術研究所) 矢部正明((株)長大)</p> <p>橋梁の耐震設計は、兵庫県南部地震を契機として地震前とは全くといってよいほど変わった。震度法に替わって地震時保有耐力法に代表される非線形静的耐震設計法が主流になるとともに、動的解析が大幅に取り入れられ、耐震設計の内容は格段に向上した。これには、橋脚等主要構造部材の変形性能の的確な評価が可能となり、動的解析ソフトウェアが飛躍的に普及する等、多分野の技術開発が大きく貢献している。しかし、性能評価型設計の導入をはじめ、変位ベース耐震設計法や免震・制震設計法、新しいダンパーテクノロジーの開発等、今後技術開発が求められている課題が山積している。兵庫県南部地震後の新たな展開に対する現状分析と、今後世界をリードする耐震技術を開発するために求められる技術課題に関して討議する。</p>
研-04 F-101	<p style="text-align: center;">平成に石造アーチ橋は甦るか！</p> <p style="text-align: center;">土木史研究委員会</p>	<p>座 長：佐藤馨一(北海道大学大学院)土木史研究委員会・委員長 話題提供者：小林一郎(熊本大学): 「ヨーロッパでの道路橋石橋の使用事例紹介」 市川紀一(クローバーテクノ(株)): 「九州における石造アーチ橋利活用の現状について」 吉原 進(鹿児島大学): 「西田橋再建を通してみた石橋道路橋建設の可能性」 辻目英正(ほつま工房): 「ライフサイクル・コストから見た石橋建設の可能性」 戸塚誠司(熊本県庁): 「熊本県内の道路橋石橋の実態と石橋の実現の可能性」</p> <p>九州における石造アーチ橋の現状と将来の利活用および新橋建設の可能性について討論する。まず、話題提供者として、小林が、ヨーロッパを中心に実際に、道路橋、新幹線鉄道用橋梁として利用されている石造アーチ橋の事例を、拡幅工事の例も含めて紹介する。市川は、九州における石造アーチ橋の利活用の現状と問題点をまとめる。次に、吉原が鹿児島県の西田橋再建の概要と石造アーチ橋の新たな建設の可能性について述べる。さらに、辻目がライフタイム・コストの観点から、鋼橋・コンクリート橋と比較し、石材の得失について論じる。最後に、戸塚が熊本県内における道路橋石造アーチ橋の現状や維持管理費の概要を述べ、発注者の立場から石橋新設の問題点をまとめる。討論会では、今後の石造アーチ橋の利活用の展望と新橋建設の可能性について、主に、構造面、耐久性、コスト面から討議を行う。</p>

番号	題 目	座長・話題提供者
研-05 F-301	<p>有明の海は今 ～有明海の環境を考える～</p> <p>第56回年次学術講演会実行委員会</p>	<p>座 長：後藤恵之輔：長崎大学大学院生産科学研究科 教授 (リモートセンシング・地盤環境工学)</p> <p>話題提供者：滝川 清：熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター教授 (海岸環境工学)</p> <p>逸見泰久：熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター講師 (生態環境学)</p> <p>小倉理一：(株)西日本流体技研・(株)ジャパンアクアテック 社長 (流体技研グループ代表)</p> <p>木谷浩三：農林水産省水産庁西海区水産研究所東シナ海環境部長</p>
	<p>今、有明海に何がおこっているのか！ かつて、ノリ養殖や豊かな魚介類の宝庫として、また特有の貴重な生物種が生息するなど“豊饒の海”であったこの海が、ここ数年来、“濁りがひどくなった”、“海藻が減った”、“魚種が変わった”、“水温が上がった”等の声が聞かれ始め、ついに、昨年夏には「大量の赤潮」が発生、本年の冬には「ノリの色落ち」により莫大な被害が生じている。この環境の悪化の原因に関し様々な推測が飛び交う中、“その現状は？”、“回復・再生の可能性と方策は？”そして、“21世紀における持続的保全の対策は？”等について、学際領域を越えた各分野からの専門家をパネリストに迎えて議論を展開する</p>	
研-06 F-401	<p>「アジアのエネルギー開発を考える」 Energy Development in Asia</p> <p>(使用言語：英語)</p> <p>国際委員会</p>	<p>座 長：池田 甫 (新日本製鉄)</p> <p>話題提供者：本田 道紀 (UNESCO)</p> <p>堀米 昇士朗(国際協力事業団)</p> <p>真殿 達 (国際協力銀行)</p> <p>安永 良 (東京電力)</p> <p>ヘフト A. スリカーンタ(東京大学)</p>
	<p>世界の中で21世紀に最も大きな発展が予想されているのがアジアである。この社会の発展を支えるのが電力などのエネルギーである。近年アジア諸国におけるエネルギー需要の伸びは非常に高い値を示しており、今後もITの普及などに伴いさらに伸びていくものと考えられる。</p> <p>一方で、地球環境保護という観点から、従来型の化石燃料主体のエネルギー開発を見直す必要な時期にきている。また、貧富の格差解消・文盲率減少という観点からは、エネルギーのもたらす恩恵を十分に享受できない層の解消も必要である。特に未電化村の解消は、これからのアジアのボトムアップにとって非常に重要な課題と言える。</p> <p>このような状況下で、われわれは何を研究し、何を議論しておかなければならないのか？ 日本はこの問題にどのような貢献が出来るのか？ パネリストと会場との間で活発な議論を展開したい</p>	
研-07 F-501	<p>外から見た日本の土木</p> <p>土木施工研究委員会</p>	<p>座 長：伊藤 喜栄(土木施工研究委員会 委員長)</p> <p>話題提供者：松川 圭輔(千代田化工建設(株) 環境プロジェクト開発事業部課長 東京工業大学大学院客員助教授)</p> <p>須藤 誠((株)アンジェロセック 副社長)</p> <p>洪 箕杓((株)大宇建設 東京支店長)</p> <p>Aydan Omer(東海大学海洋学部海洋土木工学科 教授)</p>
	<p>日本国内では、国の円熟度につれ社会基盤整備への投資の伸びが減少してきている。さらに昨今では景気の下降に伴って民間の設備投資も低迷している。そのため、国内の土木関連企業は海外に市場を求めことに力を入れようとしている。我々、土木技術者はグローバル化を目指し、努力しているものの、やはり、我々の土木技術(設計・施工)の基盤は国内で培われたものである。</p> <p>そこで「日本の建設企業と技術者」に関することについて海外と日本の両面から良く知っている方々に話題を提供していただき、日本の土木技術者に欠けていること、日本だけにしか通じないこと、逆に期待されていること、日本の建設企業と海外企業のプロジェクトの進め方の違い等を討論をし、われわれの土木技術・技術者としてのあり方を改めて考えてみたい。</p>	
研-08 121	<p>地下空間の有効利用への課題 ～浅深度から大深度への展開に向けて～</p> <p>地下空間研究委員会</p>	<p>座 長：小山 幸則((財)鉄道総合技術研究所)</p> <p>話題提供者：浅野 光行(早稲田大学)</p> <p>鈴木 弘二(国土交通省)</p> <p>樗木 武 (九州大学)</p> <p>正木 範昭((株)日建設シビル)</p> <p>松本 直司(名古屋工業大学)</p>
	<p>大深度地下の公共的使用に関する特別措置法が今年の4月1日に施行され、大都市圏(東京・大阪・名古屋周辺)の大深度地下へ展開するための基盤が整えられてきている。この機に合わせて、地下空間研究委員会では、4つの研究小委員会(計画、環境心理、地下防災、維持・管理)で調査・研究を行ってきた成果をもとに、地下空間をさらに有効利用するための課題と地下空間の将来性について、浅深度から大深度への展開を踏まえて話題提供・議論をし、外部からの意見を交えて、今後の地下空間利用の方向性を浮き彫りにする。</p>	

番号	題 目	座長・話題提供者
研-09 131	<p>国土マネジメント時代における空間情報の共有化と活用方策</p> <p>土木情報システム委員会</p>	<p>座 長：柴崎亮介(東京大学 空間情報科学研究センター 教授) (土木情報システム委員会 国土情報活用小委員会 委員長)</p> <p>話題提供者：二階堂 義則(国土交通省国土技術政策総合研究所 高度情報化研究センター 情報研究官) (土木情報システム委員会 国土情報活用小委員会 副委員長)</p> <p>町田聡(パンフィックコンサルタンツ(株) 情報技術部 GIS・環境グループ グループリーダー) (土木情報システム委員会 国土情報活用小委員会 副委員長)</p> <p>黒台昌弘(ハザマ 土木事業総本部 構造物統括部) (土木情報システム委員会 国土情報活用小委員会 委員)</p> <p>熊谷樹一郎(摂南大学 工学部 土木工学科 講師) (土木情報システム委員会 国土情報活用小委員会 委員)</p>
研-10 211	<p>先端新材料によるミッションインポッシブルの達成</p> <p>FRP橋梁研究小委員会(構造工学委員会)</p>	<p>座 長：大島俊之(北見工業大学)</p> <p>話題提供者：松井繁之(大阪大学大学院) 武田展雄(東京大学大学院) 前田研一(都立大学大学院) 宇野名右衛門(石川島播磨重工業) Issam Harik(ケンタッキー大学) 明嵐政司(独立行政法人土木研究所)</p>
研-11 212	<p>火山工学の視点から見た最近の火山活動と今後の土木工学的課題</p> <p>火山工学研究小委員会(地盤工学委員会)</p>	<p>座 長：北村 良介(地盤工学委員会 火山工学小委員会委員長, 鹿児島大学 工学部 海洋土木工学科教授)</p> <p>基 調 講 演：陶野 郁雄(国立環境研究所) 「多様化する火山災害への土木工学的対応」 田村 亨(室蘭工業大学建設システム工学科) 「有珠山噴火にともなう交通規制が地域社会に与えた影響」</p> <p>話題提供者：高橋 和雄(長崎大学)「雲仙普賢岳災害復興と今後の課題」 安養寺 信夫(砂防・地すべり技術センター 砂防部) 「有珠山噴火災害の対応からの教訓～土砂災害を中心として～」 中筋 章人(国際航空(株)技術センター) 「2000年7月神津島地震災害と火山工学としての対応」 古賀省三(国土交通省雲仙復興工事事務所) 「噴火復旧工事に伴う無人化施工技術の開発」</p>
研-12 214	<p>放射性廃棄物処分の現状と今後の展開</p> <p>原子力土木委員会</p>	<p>座 長：駒田 広也(電力中央研究所)</p> <p>話題提供者：吉田 鎮男(東電設計) 北山 一美(原子力発電環境整備機構) 堀井 秀之(東京大学) 油井 三和(JNC)</p>

番号	題目	座長・話題提供者
研-13 223	<p>基準の国際化と土木・建築コンクリート基準統一の方向</p> <p>コンクリート委員会</p>	<p>座長：上田 多門(北海道大学大学院工学研究科) 話題提供者：阿部 道彦(工学院大学建築学科) 魚本 健人(東京大学都市基盤安全工学国際研究センター) 黒谷 努(国土交通省大臣官房) 鈴木 誠(清水建設技術研究所) 林 静雄(東京工業大学建築物理センター) Prof LEE Li-Hyung(Hanyang University)</p>
	<p>現在、ISOによる基準の国際化、欧米での基準の国際化が盛んに進められているが、アジアにおいても国際化へ向けての活動が確実に起こっており、わが国においてもこれに適切に対応することが強く求められている。その際に問題となるのが、わが国の建設分野の特殊性、すなわち土木と建築が完全に分化されていることである。そこで本研究討論会では、基準の国際化・統一化に種々の側面から関係している方を、土木分野だけでなく、建築分野、さらにはコンクリート基準統一化の先輩である韓国から話題提供者として招き、土木・建築のコンクリート基準の統一の方向性に関して自由に意見交換する。</p>	
研-14 231	<p>総合土砂管理に向けた貯水池堆砂・濁水問題への取り組み</p> <p>エネルギー土木委員会</p>	<p>座長：宮永 洋一(電力中央研究所 研究企画部 部長) 話題提供者：柏井 条介(独立行政法人土木研究所 水工研究グループダム水理チーム 上席研究員)「総合土砂管理と貯水池の堆砂について」 小久保 鉄也(関西電力(株)土木建築室土木グループマネージャー)「出し平ダムの排砂について」 浦上 将人((財)ダム水源地環境整備センター研究第二部 部長)「美和ダムの排砂について」 中村 俊六(豊橋技術科学大学建設工学系 教授)「河川の土砂と生態系について」</p>
	<p>平成10年7月の河川審議会総合土砂管理小委員会報告「流砂系の総合的な土砂管理に向けて」において、河川上流から海岸に至る土砂の運動領域を「流砂系」としてとらえ、防災、環境保全、利活用などの観点から総合的に管理していくべきとの提言がなされた。ダム貯水池は、流砂系において土砂の移動や濁水の滞留に大きな影響を及ぼす存在である。従来、貯水池の堆砂・濁水問題は、個別地点ごとに解決が図られてきたが、今後は総合土砂管理の観点からも的確な対応が求められることになる。この討論会では、具体的な取り組みの事例や研究動向などの話題提供を基に、今後の方向性と課題を明らかにする。</p>	
研-15 232	<p>海外緊急調査の課題と展望</p> <p>水理委員会・地震工学委員会</p>	<p>座長：江頭進治(立命館大学) 清野純史(副座長, 京都大学) 話題提供者：中川 一(京都大学) 風間 聡(東北大学) 清野純史(京都大学) 目黒公郎(東京大学)</p>
	<p>特別調査研究費の補助により、海外において発生する各種災害の調査研究を行う制度が新設された。洪水災害、地震災害等の緊急調査にすでに活用されているものの、この制度はスタートしたばかりであり、必ずしもスムーズに運用されていない面もある。本討論会においては、次の視点から海外緊急調査のあり方を議論し、将来にわたってこの制度がより有効に活かされるための方向を見出したい。</p> <p>(1) 調査の意義(我が国、相手国、国際化) (2) 調査・研究の組織(メンバー構成、文部科学省科学研究費との相違点、・・・) (3) 報告書の意義と配布先 (4) 調査研究費目 (5) その他</p>	
研-16 234	<p>21世紀のエンジニアに求められるキャリア</p> <p>コンサルタント委員会</p>	<p>座長：山田 孝治(日本工営(株)大阪支店 支店長) 話題提供者：松井 宗広((財)地すべり・砂防技術センター 砂防部長) 星野 裕司(熊本大学工学部環境システム工学科 助手) 谷口 陽治(清水建設(株)九州支店土木工事長)</p>
	<p>技術万能時代から評価尺度多様化の時代に向かう21世紀のエンジニアには、建設技術のみならず複合専門性を要するマネジメントの時代に対応できる資質が問われる。また、市民志向に立脚し、地球環境保全に配慮したサステイナブルな創造価値を提供するためには、風土文化や感性への配慮と共にエンジニアとしての信念や哲学といった人間的側面までも問われてくる。これからは「あなたのキャリアは何ですか？」が問われるようになる。討論会では、一味異なるキャリアの持ち主より話題提供をいただき、21世紀のエンジニアに求められる資質と素養、キャリア形成には何が必要か、キャリアアップと継続教育等の活用について参加者と共に討論する。</p>	
研-17 235	<p>21世紀の都市と景観を考える — 駅と都市戦略 —</p> <p>景観・デザイン委員会</p>	<p>座長：川崎雅史(京都大学大学院) 話題提供者：井澤 岬(日本大学理工学部交通土木工学科教授) 北河大次郎(文化庁文化財部建造物課 調査部門) 中野恒明((株)アプル総合計画事務所 代表取締役) 深堀清隆(埼玉大学工学部建設工学科助手)</p>
	<p>21世紀の国土・都市・風景を創る土木エンジニアには、明確なヴィジョンとそれを裏付ける確固たる理念・哲学が求められる。しかしながら現在、都市は均質化する一方で、求められる役割は幅広く複雑・多様化し、混沌とした状況にある。風土・歴史の上に積み上げられた風景も同様に、こうした均質化と多様化の中で混然としている。本討論会では、21世紀の都市と景観を、視覚的な景観のあり方に留まらず、設計・計画、運営管理のあり方、都市認知・解釈等幅広い視点から「均質」と「多様」をキーワードに読み解き、21世紀の景観とそれを創出する仕組みのあり方を議論する。</p>	